

万葉の川筋散策の路見取図 (万葉の散歩道)

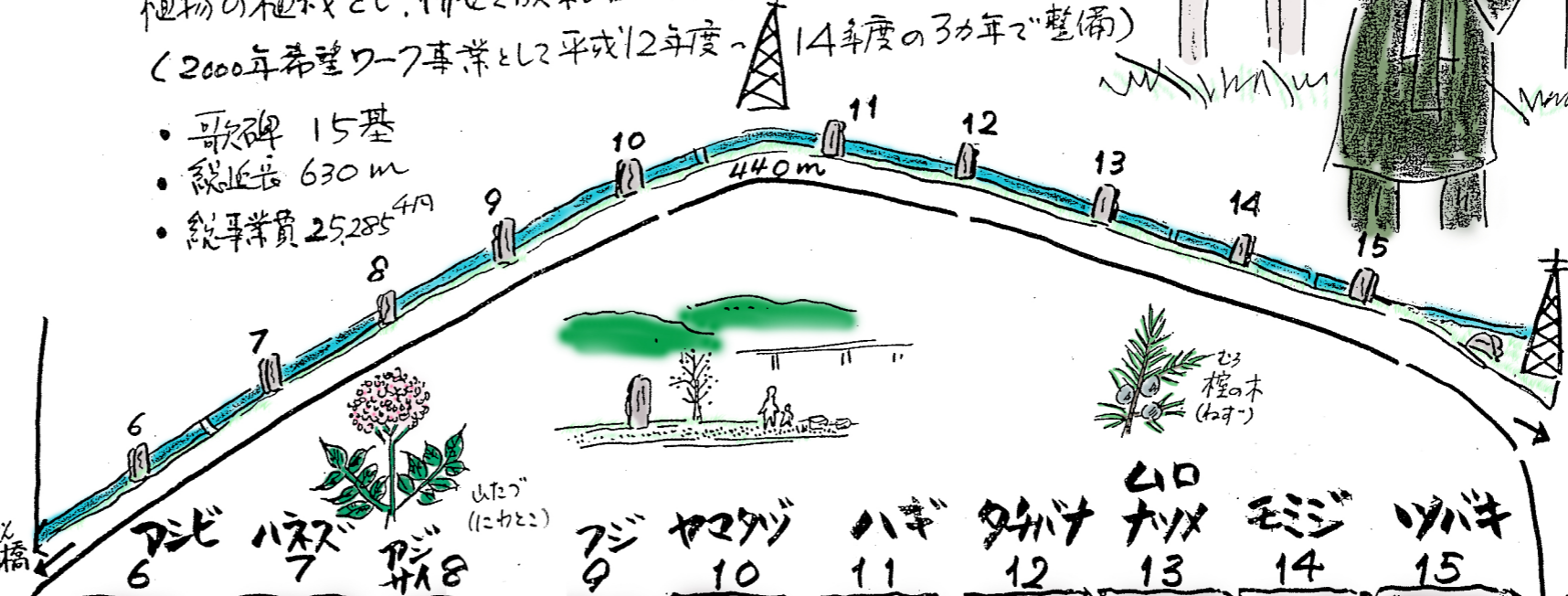
764年(天智3年)に任官された大伴家持が、この川筋に「万葉集」の歌を詠み、銅像を造った。和歌に親しく、おののちや。



親水公園

「水景文化都市」をめざす事業のひとつで、銀杏木川周辺の史跡を生かし、川沿いに万葉の歌碑を設置、歌にちなんだ植物の植栽をし、併せて散歩路の整備を行ったものです。
(2000年希望ワーク事業として平成12年度～14年度の3年間で整備)

- 歌碑 15基
- 総延長 630m
- 総事業費 25,285千円



「春の苑の紅に咲く桃の花の下に照る道に出で立つととめ 大伴家持 森上卓朗書」

「あしひきの山桜花目並へて かく咲きたらむいた恋心ひめやも 山部赤人 石塚勝郎書」

「我が宿の梅のしづ枝に遊ぶつづ 鶯鳴くも散らばく惜しむ 薩摩守 高代活人 平國哉書」

「サニモ刈る信濃の真ろわが引けは 貴人さいて活代言はむかむ 大伴家持 橋口常雄書」

「かはつ鳴く神奈備川に影見えて 今かきくらむ山吹のサカ 厚見王 緒方南翠書」

「見つつ思はば下駄の春野野に 巨勢山のつらつら橋つらつらに 垣内人足 大久保高洋書」

「秋山の黄葉を茂み葉ひぬる 妹と木もれ山道知らすも 梅本八郎 森しづ子書」

「玉掃刈り来錦麻呂室の樹と 葉か茶とかき掃かむため 薩摩守 高代活人 平國哉書」

「月待ちて家には行かむわが掃せら あから橋影に見えつ 栗原 女王 原田美子書」

「玉に貫き消たす駒らむ秋萩の 末わら葉に置ける白馬路 栗原 女王 上野正子書」

「君が行き日長くふりぬ山たつの 迎へて往かむ待たしは待たじ 衣通 玉 湯谷子書」

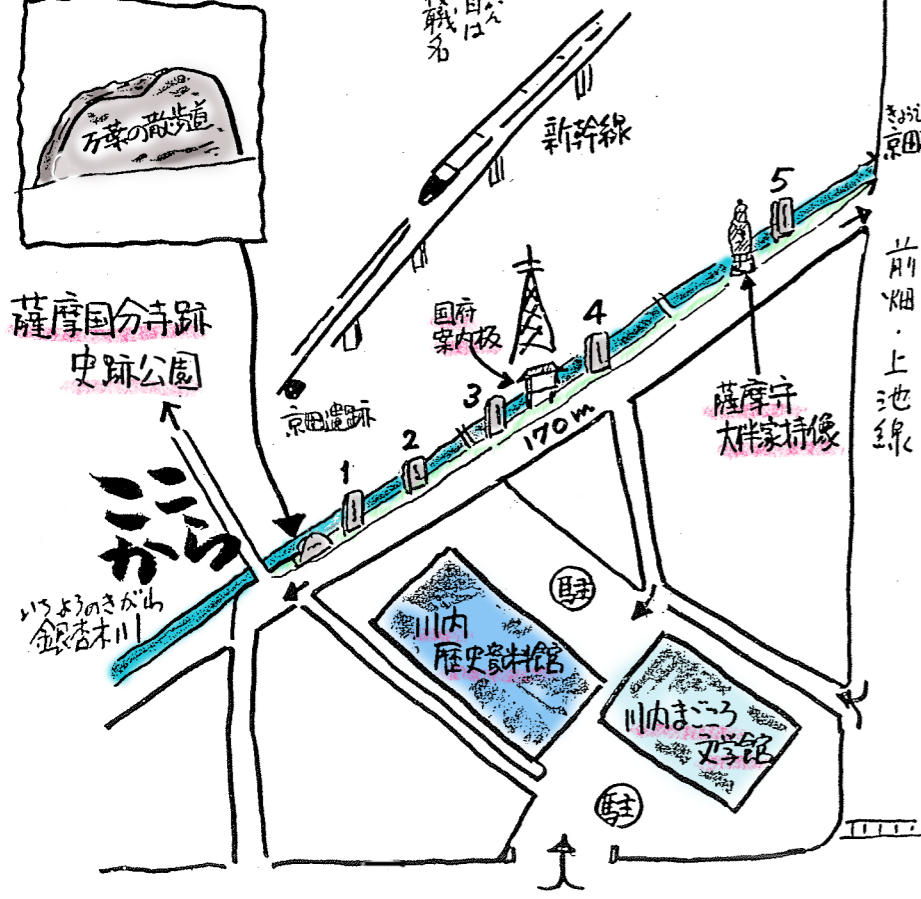
「須磨の海人の塩焼衣の藤衣 間遠にしあれはいまだ着られず 大伴家持 天野和代書」

「紫陽花の八重咲く如く弥一代にを いませわが月子現つて傳はむ 藤原 諸兄 清田朝云書」

「思はいと言ひてしそのと朱華色の 変ひやすきわが心かも 坂上 娘 女 新屋 富輝書」

「磯の上に生ふる馬酔木を手折らめと 見すへき君があつと云はなくに 大友 皇女 上月 照子書」

「川内と万葉」
702年(飛鳥時代)川内に薩摩国府(地方国の都)、780年頃(奈良時代末期)には、聖武天皇の詔(74年)により薩摩国分寺が建立されています。この間、764年には万葉集の編者大伴家持が薩摩守に任官されました。(続日本紀)
万葉集は770年頃完成したとされ、759年までの350年間に亘る長歌、短歌、連歌など約4500首が収録されています。家持の歌は、759年の国府守の時の和歌が最後になっています。薩摩国府(歌府)は、高代活人の再興の中心地。



※山たづは 榎木(はむこ)の古名

※朱華は 萩のこ

※橋の木は しのこ科の 常緑針葉樹